

# 史遊会通信

No. 216  
平成 25 年  
1 月 13 日  
発行

事務局  
☎ (03)  
3712-0651  
下山田方

討論会

## 「私の邪馬台国」

森下征二

十一月の月例会では、中山喬央氏の司会により、「私の邪馬台国」と題し、久しぶりに討論会を実施した。これは、会員による講演以外に、別途討論会を開催することにより、友の会会員を含めた全員の意見発表の機会を設け、月例会の多様化と活性化を図ろうとしたものである。

因みに過去の事例は、「日本対ロシア（十六年十一月）」「最澄と空海（十七年七月）」「頼朝と義経（十七年十一月）」「日本の女帝（十八年七月）」「日本人は何処から来たか（十九年十一月）」「史遊を読んで（二十一年七月）」等々で、三年前までは、凡そ一年一度のペースで実施されていた。

さて、討論会を復活するに当たり、論題を「私の邪馬台国」としたのは、この邪馬台国論争が国家の起源にかかわる日本古代史上の最大の問題であること、更には、白鳥・内藤両博士により論争が本格化して以来、百年過ぎた今でも、依然として広く深い関心を集めているためである。

これはおそらく、「魏志倭人伝」を中心とする文献資料のあいまいさや、考古学資料の相次ぐ新発見により、論争が絶えず新しく更新されることに加え、統計学や金属学と言った新分野からの発言も活発になり、論争の内容が更に深められてきたからではないだろうか？ これらのことから、歴史を好む史遊会

例会のお知らせ

### ◎ 1月総会

日時 平成25年1月23日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

議題 \* 24年度事業・会計報告

\* 25年度事業計画 他

総会終了後

講演 中山喬央氏

テーマ ウイリアム・ガランド

と大塚初重

自由執筆 三戸岡・隆・中込の諸氏

締切 1月31日

### ◎ 2月例会

日時 平成25年2月27日（水）

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 柴田弘武氏

自由執筆 千坂・新井・鍋屋の諸氏

締切 2月末日

の会員諸氏から、独創的な意見が期待できると考えられた訳である。

折しも、司会の中山氏から、石原道博氏編訳の「魏志倭人伝」の訳注と、中山氏自ら労作された詳細な参考資料が提供され、議論の活発な展開が図られた。深く感謝いたしたい。因みに、中山氏の提供された参考資料の内容は次の通り。

時代別・内容別論者分類、魏志倭人伝が描いた時代と地域、文身の系譜、倭人の鉢巻、身体塗色、上の長い弓、倭人の暦、持衰の謎、言語学よりみて、骨占いの系統、倭人社会の段階と類型、倭人の婚姻と女性の地位、卑弥呼の神聖王権、倭人文化の南方性、倭国大乱の原因と結果、謎の四世紀と其の後。

さてこれらにより、当日、二十名近くの参加者により熱心に意見が戦わされた。名称は討論会であるとは言え、目的はむしろ、全員の意見の開陳にあった訳であるが、それを超えて、質疑応答が熱心に繰り返されたことは望外の喜びであった。

例えば、邪馬台国の位置について、九州説・大和説に分かれて熱心な討論が行われた

一方(この中には投馬国を裏日本の出雲に比定することにより、大和の邪馬台国に至る水行十日、陸行一月を裏付けようとする注目すべき見解もあった)、「魏志倭人伝」のあいまいな記載から、倭人伝自体の資料性を疑問とする見解も見られた。

また考古学資料について、根強く残る三角縁神獣鏡の魏鏡説(三角縁神獣鏡が魏帝から卑弥呼に下された鏡であるとの説)に対しては、制作技術や原料に着目し、日本国で作られた鏡であり、邪馬台国畿内説を補強するものではないとの主張もあった。

更に、箸墓古墳の周辺出土土器の付着物の炭素十四年代測定法による結果を重視し、箸墓の年代を三世紀前半に引き上げて、卑弥呼の墓に想定する意見については、ほかの遺物に比べ、土器付着物についての炭素十四年代は、年代が古めに出ると指摘し、最近の考古学会の傾向として、年代を古めに算定する動きがあることを考慮しなければならぬとの主張があった。

また九州説を取る意見では、環濠集落が存在するか否かの問題、弥生時代の鉄器が発掘されるか否かの問題が、極めて重要ではないかとの意見が出されたのに対し、畿内説から

は、北九州に国王級の大古墳が少ないこと、邪馬台国ほどの強大な勢力は、畿内においてそのまま大和国家に成長したと見る方が自然ではないかとの反論があった。

素直と言えば、「魏志倭人伝」を素直に読まなければならない、と言う意見が大勢であった(距離と方角のどちらを重視するかの問題が残る訳であるが)。しかし、事が邪馬台国問題である限り、いかなる考古学的な資料であれ、「魏志倭人伝」等、文献資料を離れて論議することは避けなくてはならないのではないか?

何はともあれ、邪馬台国の問題は我が国の起源にかかわる問題である。それが大和にあるとすれば、九州から中部日本を統合する統一国家が、三世紀の前半の我が国に存在していたことになり、北九州であれば、それはただ九州内部の統合の問題に留まり、日本を統一する政権はなかったことになる。

幸い、当会は多岐にわたって歴史を広く考察する人材に恵まれている。また、その道で名を成している方も数多い。それらの方々が一堂に会して、たまたま一つの歴史上の問題を議論することは、非常に意義のあることだと言えないだろうか? ましてや今回は、国

の成り立ちを考えるものであった。

開催前には議題が偏り過ぎていたかもしれないと言う危惧もあった。しかし、出席者が全員、一人の例外もなく発言された。私は討論会を開催した趣旨は、全うされたと考えた

い。  
これからも年に一度は、このような催しがあっても良いのではなからうか？

以上

自由執筆

熊野三題 その三

「起請文」

平山 善之

「正尊」というお能がある。

土佐坊正尊という男が頼朝の命を受け、義経暗殺のため上洛するが、弁慶に義経の前に引き立てられ、熊野参詣のための上洛、と偽り、起請文を書く。

「敬つて白す起請文の事。上は梵天帝釈。四大天王閻魔法王五道の冥官泰山府君。下界の地にハ伊勢。天照大神を始め奉り伊豆箱根。富士浅間。熊野三所。金峰山。王城の鎮守。稻荷祇園賀茂貴船。八幡三所。松の尾平野。総じて日本国の……」

謡いの習い物、聞かせどころである。

起請文や誓紙というのは、天地神明に誓つて嘘偽りではない、というものであるから、寺社の発行する神符が用紙として使われた。東大寺、薬師寺、熊野権現などの神符の裏面に書いた。

此の時、正尊が何に書いたかは明らかではないが、熊野参詣というから、熊野大社の牛王宝印かもしれない。

直木三十五著「大坂落城」という小説がある。関ヶ原前夜、諸大名懐柔のため、家康の謀臣本多正信が伏見城内で誓紙を書いている場面。

本多佐渡守正信は、何も聞えないかのやうに、小さい部屋の中に、机を置いて、物を書いてゐた。

一筆啓上候、今度以御肝煎内府罷移之由満足に被存候向後何而彌々可被仰談議御尤に候、(中略)

「熊野々々」

と、云つて左手を出すと、一人の家来が「はっ」と、答えて、手文庫から、朱の三羽鳥の印を捺した熊野権現の誓紙をもって

また。正信は、それへ、神文を認めて、

慶長四己亥年閏三月

本多佐渡守正信

堀尾帯刀殿

筆を置いて、

「これを、帯刀の邸へ持参いたせ」

このシーンから二つのことがわかる。

当時は起請文といえば熊野権現の牛王宝印が一般的に使われ、「熊野」がその代名詞になつていたことが一つ。また誓紙といつても戦国乱世の世の中、乱発され、出した方も破つても平気のものとなつていたことが「手文庫」の中に用紙が大量にある様子から窺える。

何故、熊野権現の牛王宝印が誓紙に最も多く使われるようになったのか。いつ頃からそうなつたのか。

熊野には、熊野比丘尼という人たちがいて全国を廻つて、「熊野観心十界曼荼羅絵図」という仏画の絵解きをして歩いたそうである。

比丘尼たちは諸国を巡り歩き、牛王宝印の神符やお守り売って歩いた。さらさらを摺り歌を唄つて地獄・極楽を説き、熊野について

語る強力なセールスマン。即ち、熊野のお札は商品として、それも比丘尼という販売力ある行商人によって全国にばらまかれたであろうことが想像される。彼女らは江戸時代ころになると、紅白粉をつけ春をひさぐ者も現れたという。

また、那智の滝の神秘性から発祥した熊野の山岳信仰は、密教の影響をうけ、修験道として、熊野山伏集団を生んだ。山伏は、山岳地帯を隊を組んで渡り歩く。

屈強な体力が無ければ修行は覚束ない。全国山野を跋渉し、これも布教活動にも余念なかつたであろう。曼荼羅絵解きと同様、商品として神符の行商人の役割を勤めたのである

自由執筆

四字熟語が面白い

鯨 游海

次の四字熟語はよく使われる耳に馴染んだ語ばかりだが、何処か少し変だと思いませんか。学識豊かな史遊会の皆さんでも全問正解出来る人は居ないと思われまます。

即ち、四字熟語は奥が深い。「千紫万紅」のたつた四文字で、然も春や花の文字を使わ

う。現在、熊野神社は全国に三千社以上あるというが、これも比丘尼や山伏の活動の結果とも言える。

山伏は勸進帳の「山伏問答」にもある如く刀を帯し、足ごしらえも厳重な武装集団であった。宗教者であると同時に戦士として頼られる存在でもあった。平安以降、後白河法皇三十三回、後鳥羽上皇二十八回という度重なる熊野御幸は、その武力を味方につける為の政治的なおいがする。承久の変において熊野はあげて官軍についた。そのため、別当は北條氏に処分されている。つまり、武士階級と山伏は近い関係にあった。そして起請文とか、誓紙を最も利用したのは武士階級であ

ずして「春爛漫・花満開」の浮き浮きした様子を余す所なく表現する。反面、誤記誤読の危険が常に潜んでいる。

諸兄には老婆心ながら四字熟語を使うときは面倒でも必ず字典、辞書に当って確認するように努められたい。

①興味深深 深深は誤りで津津が正解。津は身体から汗が浸み出ること。水等が自然に湧き出ること。津は進む意。なお深深は奥深いさま、静寂なさま。

り、戦国乱世の世になって、一層その需要は高まった。ここにも他の神社の神符にも増して、熊野牛王宝印が誓紙の代名詞になっていた理由がある。

一方で、戦国時代は、権謀術数只ならぬ時代であつて、合従連衡常ならず、昨日結ばれた同盟も今日は破棄されるような日々であつた。起請文は、用紙が商品として大量販売されると共に、その価値を下げていった。本多佐渡守は事務的に誓紙を相手方に送りつけており、直木の小説は、いかにもという雰囲気をもっている。

②画竜点睛 睛ではなく睛。目の青い部分睛のこと。竜を画いても睛を入れ忘れると絵にならない。

③精励格勤 格ではなく恪。謹しむ意。恪勤で真面目に努力する意。精励と同義で対句。

④短刀直入 短ではなく単。複の対語。単身で敵陣にズバリと斬り込むのである。

⑤波乱万丈 乱ではなく瀾。瀾は波。万丈は波の高さの表現。

⑥浅学非才 非ではなく菲。薄い意。浅学

と、才とで対句を成す。非では無に等しく  
バランスを欠く。

⑦危機一発 発ではなく髪。髪の毛程の僅差  
をいう。号砲一発に驚かされ危機を感じるの  
ではない。これなどはウツカリミスの典型。

⑧氣息延延 延ではなく奄。塞ぐの意。原義  
はおおう。誰でも口を塞がれると息が出来ぬ

⑨浮雲流水 浮ではなく行。流水は動きがあ  
るのに浮雲だと動きがなく対句を成さない。

⑩異心伝心 異ではなく以。親しい或は特別  
な関係だと無言でも心と心は通じ合える。

⑪無念夢想 夢想は誤りで無想。仏教用語。  
雑念の無い無我の境地。禅の悟りの境地。夢  
想は空想。なお無我無中は無我夢中が正しい

⑫一陽来福 福は誤りで来復。福が来るので  
はなく陽が復た昇るので目出たいのだ。

⑬美字麗句 美字は誤りで美辞。辞は言葉、  
言語をいい字より広義。辞典は言葉の説明書

⑭厚顔無知 無知は誤りで無恥。厚かましく  
図々しい人を指す厚顔と同義異字の恥知らず  
の人のこと。

⑮旗色鮮明 旗色は誤りで旗幟。幟とは目印  
となる旗、のぼり旗をいう。なお幟をしょく  
という訓みはない。

⑯和洋折仲 折仲は誤りで折衷。衷の字は中  
仲に通じ、中央、中正の意味。

⑰憂柔不断 憂ではなく優柔。優には優しい  
伸びやか、豊か、ゆるやか等の良い意味が多  
いが、優柔のみは決断力のないぐずぐずした  
卑語となる。

⑱天衣無法 無法は誤りで無縫。天女の衣に  
は縫い目が無い。転じて詩や文章の美しい様  
⑲百鬼夜光 夜光は誤りで夜行。悪事を働く

自由執筆

晩秋の旅

小田 紘一郎

去年は、ことのほかに暑い夏であった。体  
調を壊したりしたが秋風とともに回復した。  
そんな事もあつて十月の終りから十一月の晩  
秋のおよそ一ヶ月の間に二つの小さな旅をし  
た。

まず第一は、ローカル線の旅である。一泊  
二日であるので、時間節約のために新幹線で  
新潟にとんだ。学生の頃よく普通列車に乗っ  
たが、今はあつという間に着いてしまう。上  
越国境の長いトンネルを過ぎると、そこは雪

連中は裏社会に闇の世界を跋扈する。夜光る  
のではない。

⑳和気曖曖 曖曖は誤りで藹藹。和やかなさ  
ま。曖曖だとうす暗くぼんやりしているさま  
となる。

さて読者諸兄の正解率はどれ程であろう  
か。ついウツカリしたが実は知っていたとい  
うのは正解には入れないで採点してみよう。

国であり、袖の里であるが、そこを蛇行しな  
がら走ってゆく上越線は魅力あるローカル線  
であった。

新幹線は、雪対策もあつてか実にトンネル  
が多く外の景色に接することが少なくなつた  
のは残念である。便利さを求めて情趣が失わ  
れている。

新潟から磐越西線に乗って会津若松まで出  
た。二両のジーゼルカーは、阿賀野川に沿っ  
て走るのであるが、当初いっばいであつた乗  
客も少しずつ降りてゆき、最後の方は、一人  
旅の私を含めて二、三人になってしまった。  
会津若松で一時間程待ち合わせ時間があつ  
たので街をブラブラして只見線に乗り換え

た。いつもの事ながら、会津は広く奥が深い事を感じる。すばらしい水田が広々としていゝ。会津藩の経済的地盤であつたであろう。

京都から来たという妙齡の婦人が前に座つたので旅の話などしているうちに会津川口に着いた。ここから只見まで昨年の水害により不通なので代行バスに乗り換えた。

宿は只見の温泉で田舎料理を楽しみ、早々と寝た。

二日目は只見から上越線の小出まで出て、越後川口から長野までの飯山線に乗った。三時間あまりの山間を走る旅であつた。只見では紅葉が最高であつたが、飯山線はやや早かつた。途中から千曲川を車窓に見ながら楽しんで。長野で、小布施の栗おこわやりんご等を買ひ込み、新ソバを食べて長野新幹線に乗つてさつと帰宅した。

よく学生時代からローカル線の旅をしており、二、三年前、新緑の五月に同じようなルートで行つたが、季節を変えるとまた趣が異なり楽しみが増す。これらの線は豪雪でも有名であるが、冬の頃また乗つてみたいと思つている。

二つ目は、新潟県岩室温泉を妻と訪ねた。上越新幹線の燕三条駅から車で二十分位の

ところにある名湯である。「ゆめや」という旅館は、料理の美味しい、いわゆる割烹旅館として有名であり、部屋数も十室と少なく庭も広々として今は紅葉が盛りであつた。部屋には源氏物語の巻名がかかげられていて、五帖の中からどういふ基準で十選んだのか、興味があつたが、女将が不在でわからなかつた。「浮船」の部屋があつたが、船ではなく正確には舟であつて、仲居さん達にはその旨伝えておいた。

平日であつたので客も少なく、大きな風呂を独り占め出来て、帰るまで七、八回入浴を楽しんだ。料理を作ることや片付けることがないため、妻はこのような旅をいつも喜んでいる。

源氏物語の巻名を部屋に名付けているところはいたるところで見受けるが、我々が泊つたところは「夕顔」という名が付けられていた。この巻では、夕顔が「生きすだま」によつて殺されてしまうという不気味な話が語られていて、ここに宿つた人はそんなことを知つているだろうかと思つたりした。

夜中に激しい雷雨があつたりしたが、物語の中にも「須磨の巻」で語られていたり、又紅葉はいたる所に出てくるが、「紅葉の賀」

という所に美しく語られている。天皇の譲位が近くなるところなどに、好んで紅葉の頃が使われている。美しい自然描写が源氏物語を讀む大きな楽しみの一つであるが、自然と人事が合まつて語られる景情一致は物語の大きな特徴である。宿においていろいろ感じた事や、物語に出てくる事などを考えながら、帰つたらまたそこらを読んでみようと思つた。

雪国の宿であるので、雪の多い二、三月の頃は今の紅葉と異なる「あわれ」があるだろうから、また訪れようと妻と話しながら帰つてきた。

旅は、何かとせわしい日常を離れて、別の世界につれていってくれ、様々の物を見、いろいろな事を考えさせてくれる。しかし旅において出会うのは結局自分自身であると言つたのを讀んだことがあるが、(確か学生時代に讀んだ三木清の「人生論ノート」であつたと記憶する)そこに旅する大きな意味があるように思う。

学生時代から、また社会人になつてからも海外を含めてよく旅をしている。今後とも一人で、妻と、又孫達と旅を楽しみながら続けていきたいと考えている。